様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ５ 月 ２３ 日現在

機関番号：３２６６３
研究種目：挑戦的萌芽研究
研究期間：2012～2013
課題番号：２４６５１２７８

研究課題名（和文）地域情報学の手法を用いた海域東南アジアにおける境域社会の動態の解明

研究課題名（英文）Dynamics of Interface Societies in Maritime Southeast Asia: An Approach from Area Infomatics

研究代表者
長津　一史（NAGATSU, Kazufumi）

東洋大学・社会学部・准教授

研究者番号：２０３２４６７６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　3,100,000円、（間接経費）　930,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究は、東南アジア海域情報学の定礎を念頭におきつつ、地域情報学の手法を用いて、海域東南アジアの境域社会の動態を国家間比較の視点から明らかにしようとした。特に着目したのは、バジャウ人を主とする海民の人口移動、資源利用、民族間関係の三点である。具体的な作業としては、①インドネシア、マレーシア、フィリピン三カ国の海民に関わるセンサスやGISデータ等を収集・統合・体系化し、②その時空間情報データとフィールドデータを基に、海民がつくる境域社会の動態に関する資料集と論考をまとめ、③東南アジア海域情報学の方法論的基盤を構築し、同時にその具体的成果を提示することを試みた。

研究成果の概要（英文）：　The project aimed at examining dynamics of interface societies through an approach from Area Infomatics in order to establish, based on the present attempt, Southeast Asian Maritime Infomatics in near future. It focused on the Sama-Bajau as maritime folks and their population flow, resource exploitation and inter-ethnic relations.
In the project, members 1) systematically collected and integrated data such as demographic censuses or geographic information of the maritime folks in Indonesia, Malaysia and the Philippines, 2) compiled database and case studies on the interface societies formed by the maritime folks 3) made a foundation of methodological approaches of Southeast Asian Maritime Infomatics, and 4) showed the ethnographic products using the data of the informatics.

研究分野：複合新領域

科研費の分科・細目：地域研究

キーワード：海域東南アジア　境域社会　地域情報学　人口移動　民族間関係　バジャウ　GIS

１．研究開始当初の背景

東南アジアを対象とするこれまでの地域情報学研究は、主に大陸部を対象に、農村地域における土地利用の変遷等に焦点をおいたデータ構築・調査を進め、具体的成果を挙げてきた。これに対し、1990 年代まで資料面の制約があったことや、ジャワ島などを除き住民の移動性が高く、土地との結びつきで社会動態を捉えることが困難であったことなどから、島嶼部の社会文化動態に関する地域情報学研究は、ほとんど進展をみていない。

本研究の代表者の長津一史と分担者の赤嶺淳・青山和佳は、先行する科学研究費プロジェクト「海域東南アジアにおけるグローバル・アクターと周縁社会」（課題番号：21510271）を実施する過程で、2000 年代以降、島嶼部の 3 カ国―フィリピン、マレーシア、インドネシア―において、センサスを始めとする電子版統計データと社会文化面の情報を含む GIS データの質と利用環境が著しく向上し、海民の社会文化動態を俯瞰的に捉える上できわめて有用な時空間情報へのアクセスが可能になっていることを確認し、その一部を研究成果に利用してきた（「＜特集＞東南アジア海域世界の社会史再考――サマ・バジャウ人の視点」『白山人類学』13 号（2010）参照）。

研究メンバーは、それらの時空間情報を、自らのフィールドデータと一次的史資料に接合することによって、俯瞰と微視の双方の視角から、近現代以降の海域東南アジアの境域社会の動態を検討することが可能になると確信した。

２．研究の目的

本研究の第 1 の目的は、島嶼部 3 カ国の時空間情報データの収集・整理を進め、海民の移動、海産資源利用、民族間関係の 3 点に関する時空間情報データベースを構築し、『海域東南アジアの境域社会の動態に関する資料集成』を編纂することである。

第 2 の目的は、各メンバーが、移動、海産資源利用、民族間関係に関するフィールド調査を実施し、その成果を海域全体の時空間の文脈に定位して、個別の論考をまとめることである。

第 3 の目的は、3 カ国の調査結果を比較対照し、「開発の時代」やグローバル化等の同時代的契機を指標とする、海域東南アジアの境域社会の連続および非連続を展望することである。

本研究における境域社会は、生態・社会・文化等の複数の次元で中間相に位置する社会と定義される。海域東南アジアの境域社会は、海民を主とする人口の恒常的なフローとそれに起因する社会的流動性、資源利用の柔軟性、文化的な混淆を特徴とする。その動態の解明は、近現代の東南アジア海域世界の持続と再編の過程を理解するための鍵である。しかしながら、従来の研究の多くは、民族誌的・歴史学的なミクロなデータか、あるいは社会統計学的なマクロなデータのいずれかのみに依拠しており、同海域世界の境域社会の動態を全体的かつ具体的に明らかにしてきたとはいい難い。その理由のひとつは、海域東南アジアに関する時空間情報データの統合的利用が不十分であったことによる。こうした点をふまえ、本研究は、既述の 2000 年以降に公開された時空間情報データと、フィールドデータの統合的利用を通じて、東南アジア海域世界の境域社会の動態を複眼的に考察しようとする。

本プロジェクトは、将来的には、時空間の面でより包括的な東南アジア海域情報学の確立を目指す総合的地域研究のプロジェクトを創成することを射程に入れている。東南アジア海域情報学とは、東南アジアの海域・海民に関わるマクロな時空間情報データとミクロなフィールドデータを統合・研究資源化し、その研究資源を共有する学際研究の場から、東南アジア海域世界の地域的個性を総合的・全体的に理解すると同時に、近現代におけるその連続性と非連続性を実証的に示す地域研究の挑戦的試みを指す。本研究は、研究メンバーがこれまで継続的に調査を実施してきた境域社会に焦点を絞り、東南アジア海域情報学を個別具体的に実践しようとするものである。

３．研究の方法

本プロジェクトの 1 年目は、時空間情報データの収集・整理・分析に重点をおいた。

収集データ：19 世紀末から 1990 年代までの人口センサス（紙版）、2000 年と 2010 年の電子版センサス、行政区分・海図・航海図・海洋地形図・衛星画像等の GIS データ

入手先・調査機関：フィリピン（マニラ）国家地図資源情報局 NAMRIA・国家統計局 NSO／インドネシア（ジャカルタ）国家土地調査調整局 BAKOSURTANAL・中央統計局 BPS／＊なお、マレーシアに関しては国内の研究機関において関連資料を入手した。

同時に各メンバーは、1 年目または 2 年目に、これまで調査を継続してきた境域社会でフィールド調査を行った。

・長津：インドネシア東ジャワ州スムヌプ県、マレーシア・サバ州センポルナ県
・赤嶺：マレーシア・サバ州クダト県
・青山：フィリピン・ミンダナオ島ダバオ市

フィールド調査では、人口移動、資源利用、民族間関係に焦点をおき、『海域東南アジアの境域社会の動態に関する資料集成』のデータを収集することを共通目標とした。

その他、フィリピンとアメリカにおいて、1970 年代にバジャウ人に関する先駆的な民族誌的研究をおこなった人類学者の協力を得て、画像等の 1 次資料を入手し、またそれ

らの説明を受けた。

４．研究成果

◇　研究の流れ

全期間にわたり研究メンバーは、海民・海域の時空間情報データベースと資料集『海域東南アジアの境域社会の動態に関する資料集成』の項目選定・分析作業をおこなった。長津は、島嶼部 3 ヵ国全体の海民に関わる人口動態を、植民地期および近年のセンサスを用いて画像化・空間情報化した。これに人口移動や文化要素の分布等をあわせ、島嶼部三カ国全体の海民の社会文化動態に関する基礎データの整理を進めた。青山は、フィリピン・メディア（とくに新聞）に表象されるサマ人関連の情報を収集・分析した。赤嶺は、自らがこれまで収集してきたサマ諸語の言語データと画像資料の電子化を行った。海外においても上述のとおり資料収集と収集資料の分析をおこなった。海外における主な研究活動は次のとおりである。

【2012 年度】

8 月：フィリピン統計局（NSO）、フィリピン地図局（NAMRIA）において、同国の海民に関わる電子版センサス、人口移動・資源利用・民族間関係に関わるその他のデータ、地図データに関する調査を実施、必要なデータを購入した。アテネオ・デ・マニラ大学フィリピン文化研究所（IPC）では、1960-70 年代にフィリピン・スルー諸島で民族誌的調査を実施した Gerald Rixhon 教授ら、海民研究の専門家に、関連する時空間データの整備・利用環境を尋ね、また情報共有のための手法についてともに検討した。

12 月：インドネシアの統計局（BPS）において 2010 年センサスを中心に、同国の海民に関する時空間データを収集した。

【2013 年度】

７月：アメリカ合衆国ポートランド在住の Clifford Sather 元フィンランド大学教授と、サンフランシスコ在住の Harry A. Nimmo カリフォルニア大学名誉教授を訪問した。両教授は 1970 年代にそれぞれマレーシア・サバ州とフィリピン・スルー諸島で人類学的フィールド調査を実施したバジャウ研究の第一人者である。両者のもとで各メンバーは自らの研究成果を報告し、また上記データベースと資料集成の項目・内容・構成に関してアドヴァイスを受けた。Sather 教授からは『資料集成』作成のために 1970 年代のバジャウ人に関する画像資料を託され、それらを電子化することの許可を得た。資料は日本で長津が電子化した。現在はデータベース上での公開を準備している。

◇　データベースと資料集成

本研究においては、海域東南アジアの境域社会の動態に関するデータベースと『海域東南アジアの境域社会の動態に関する資料集成』の作成を進めてきた。ウェブにおける公開環境が十分に整わなかったことなどにより、2013 年度内に時空間情報データベースと『資料集成』を公開することはできなかった。2014 年 5 月時点では、同環境を整え、両者の公開準備を進めているところである。ここでは、対象村落と資料集成・データベースの主要項目を記す。

１）資料集成・データベースで対象とするのは、下記の図に示した 51 の村落である。このうちメンバーが長期フィールド調査をおこなったことのある 5 つの村落については、詳細な民族誌的記述を加えている。

２）資料集成・データベースの主要項目は、次のとおりである。

＜対象名＞
　コード／クラスター／村落名／国／州／県／行政村

＜インフォーマント＞
　名／性／年齢／職業／学歴

＜調査方法＞
　長期フィールドワーク／短期訪問／文献等二次資料

＜民族名称＞
　日常的な自称／公的な場での自称／日常的な他称／公的な場での他称

＜地理＞
　海底地形／周辺地形／近接都市名

＜人口＞
　／バジャウ人口の位相（多数派／少数派／混在）／民族構成／

＜村の歴史＞
　設立年／移動元の土地／移住の理由／移住の契機となった出来事

＜言語＞
　サマ語の類型／国家語の浸透度合／地域

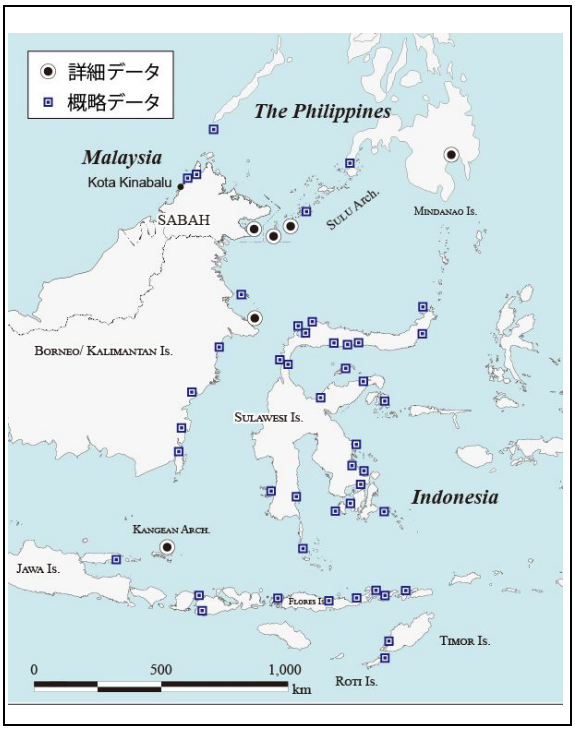

図 資料集成・データベースの対象村落

のリンガフランカ／辞書情報／自らの言語の呼び方

＜生業・漁業＞

主な生業／漁業技術／特殊海産物／漁具／出漁範囲／主な漁場／加工法／市場／仲買人／船のタイプ／アウトリガーの形／エンジン／造船場所／船大工

＜食＞

主食／主食の入手法／副食の代表的調理法／かまど／水の入手法

＜家屋・集落＞

集落の位置／集落のタイプ／家屋の形状／屋根材／学校の有無

＜ネットワーク＞

結婚の範囲／親族関係の広がり／社会的訪問の範囲／出漁時の寄港地／主な交易場所／他民族との通婚

＜宗教＞

宗教／主なイスラーム組織／霊媒／信仰の空間／儀礼／墓地／墓標

＜神話・歴史表象＞

起源神話のタイプ／起源神話のモチーフ／起源神話の語り／その他の神話・伝承／文字資料の有無・内容

◇　海民の混淆性に関する考察

収集した資料に基づき、代表者は海民としてのバジャウのアイデンティティの流動性、海民の混淆性に関する複数の論考をまとめた。以下はその概略である。

バジャウ人とは、マラヨ・ポリネシア語系のサマ語を話す人びとで、多数は漁業や海上交易をはじめとする海の生業に依存している。フィリピンとマレーシアではバジャウ、インドネシアではバジョと呼ばれる。バジャウもバジョも、他の民族による呼び名である。自らはサマ（Sama）と称することが多い。バジャウ人の一部は、かつて船上生活を営んでいたことでも知られる。

バジャウ人の居住地は、フィリピン南部、マレーシア・サバ州、インドネシア東部の 3 カ国に跨がる。2000 年のセンサスによれば、3 カ国全体の人口は 1,077,020 人になる。主な集落の分布範囲は、南北ではインドネシア南端のロティ島からフィリピンのミンダナオ島の南西端までの約 2000 キロメートル、東西では東ジャワ州沖合からマルク諸島までの約 1300 キロメートルに及ぶ。100 万人程度の人口規模の民族が、これほど広域に拡散している例は、島嶼部東南アジアでは他にみられない。

集落がこのように広い範囲に拡散したのは、かれらがナマコやベッコウ等の中国向け稀少海産物を求めて島々をわたる移動を繰り返してきた、数世紀にわたる歴史過程の帰結であると考えられる。バジャウ人は、遅くとも 18 世紀までに、スラウェシ島南部からオーストラリア北岸にまでナマコ採捕のために出漁し、その航路上の島々に集落を形成していた。

かれらの移動性の高さは、現在においても変わらない。東カリマンタン州ブラウ県の沖合、バリककップ島では、フィリピン南部からマレーシア・サバ州のセンポルナに移住、その後、サメ延縄漁のためにこの島に移り住んでいた漁民が数家族、住んでいる。このうちの一家族の成員は、マレーシアとインドネシアの 2 つの国籍を持っていた。南東スラウェシ州ワカトビ県のワンギワンギ島では、東ヌサトゥンガラ州のロティ島にあるもうひとつの家との間を往来し、そこからさらにオーストラリア国境のアシュモア礁にまで、サメと高瀬貝を求めて出漁している漁民の話を聞いた。この漁民はオーストラリアの国境警備隊に拿捕され、ダーウィンの不法移民収容所に拘留されていたこともある。

かれらは自らをサマと名乗り、サマ語を話す。しかし、その出自はきわめて混淆的で、両親がともにバジャウ人ではなく、サマ語と異なる言語を母語としている（いた）こともある。マドゥラ島の東、カンゲアン諸島東のサプカン島では、バジャウ人が人口の多数を占める。しかし、その「バジャウ人」のなかには、スラウェシ島を故地とするマンダル人やマカッサル人、ブギス人等に出自を持つ人が少なくない。両親の双方またはいずれかがバジャウ人である人は、おそらく半数に満たない。

カンゲアン諸島の人びとは、「サマ語を話す人はサマ（バジャウ）人ではないか」と述べる。その言葉は、出自や出身地ではなく、現在の言語使用を主な指標とするかれらの自己定位のあり方を端的に示している。様々な出自の海を移動する人びとが、島嶼沿岸においてサマ語を基盤に混成した集団―バジャウ人とは、そうした混淆的な海民でもある。

◇　研究会等の活動

全体としておこなった研究成果の公開活動は以下のとおりである。

・2012 年 8 月：アテネオ・デ・マニラ大学 IPS: “Recent Studies on the Sama-Bajau in Japan”で発表（全員）

・2013 年 2 月：京都大学東南アジア研究所 Asian CORE Program Seminar in 2013 “Interface, Negotiation, and Interaction in Southeast Asia”で発表（長津、赤嶺）

・2013 年 7 月：アメリカ合衆国ポートランド Clifford Sather 教授宅・サンフランシスコ Harry Nimmo 教授宅にて成果報告（全員）

・2014 年 2 月：京都大学東南アジア研究所 Asian CORE Program Seminar in 2014 “Interface, Negotiation, and Interaction in Southeast Asia”で発表（長津）

本プロジェクトに基づく各自の最終的な成果は、2014 年 8 月にマレーシア・サバ州のサバ大学（UMS）で開催される第 12 回 Borneo Research Council（ボルネオ研究協会）におけるパネル Social Dynamics of the Sama-Bajau: Comparative Perspectives on

their Ethnicity, Religion and Foodway（サマ・バジャウの社会動態―エスニシティ・宗教・食様式に関する比較研究）で報告される。各報告のタイトルは、下記のとおりである。
・長津一史 The Bajau as a Maritime Creole: Periphery, Mobility and Ethnic Process in Wallacean Sea, Southeast Asia（クレオール海民としてのバジャウ人―ウォーレシア海域における周辺性・移動性・民族過程）
・赤嶺淳 Conserving Marine Biodiversity for Cultural Diversity: A Case for Sea Cucumbers and Sharks among Bajau Societies（文化的多様性のための海洋生物多様性の保全―バジャウ社会におけるナマコとサメを事例として）
・青山和佳 To Become "Christian Bajau": The Sama Dilaut's Conversion to Pentecostal Christianity in Davao City, Philippines（クリスチャン・バジャウになること―フィリピン・ダバオ市におけるペンテスコタ教会）

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計９件）
◇ 長津 一史
(1) 長津 一史 2014,「マレーシア・サバ州におけるイスラームの制度化―歴史過程とその特徴」『東洋大学アジア文化研究所研究年報』48: 279-296, 査読無.
(2) 長津 一史 2013,「東インドネシア、海民の社会空間―ゲセル島で村井さんと考えたこと」『ワセダアジアレビュー』14: 31-34, 査読無.
(3) Nagatsu, Kazufumi 2013, Spatial Data on Distribution of Sama-Bajau Population in the Southern Philippines, *Hakusan Review of Anthropology* 16: 139-147, 査読有.
(4) 長津 一史 2012,「東南アジア海域世界における『海民』の生成過程―インドネシア・スラウェシ周辺海域のサマ人を事例として」『白山人類学』15: 45-71, 査読有.
◇ 赤嶺淳
(5) 赤嶺 淳 2014,「環境問題とむきあう―モノ研究からマルチ・サイテット・アプローチへ」『地域研究』14(1): 139-158, 査読有.
(6) Akamine, Jun 2013, Intangible Food Heritage: Dynamics of Whale Meat Foodways in Contemporary Japan, *Senri Ethnographical Studies* 83: 215-227, 査読有.
(7) Akamine Jun 2013, Reconsidering Blast Fishing within a World System: A Civil War and Economic Development in the Southern Philippines, *Journal of Chinese Dietary Culture* 9(1): 77-111, 査読有.
◇ 青山和佳
(8) Aoyama, Waka 2014, Living in the City as the Sama-Bajau: A Case Study of Gwapo's Family, (translation), *Hakusan Review of Anthropology* 17 (in print), 査読無.
(9) Aoyama, Waka 2012 Social Inequality among Sama-Bajau Migrants in Urban Settlements: A Case from Davao City, *Hakusan Review of Anthropology* 15: 7-44, 査読有.

〔学会発表〕（計 14 件）
◇ 長津 一史
(1) Nagatsu, Kazufumi Feb. 11, 2014, "New Maneuver through Old Network: Maritime Folks' Trading of Sea Turtle and Used Clothes in Wallacea," presented at "Asian CORE Program Seminar "Interface, Negotiation, and Interaction in Southeast Asia," Kyoto: Center for Southeast Asian Studies (CSEAS), Kyoto University.
(2) 長津 一史 2013 年 12 月 15 日,「趣旨説明」および「民族生成をめぐる国家と地域の文脈―マレーシアとインドネシアのバジャウ人」第 22 回日本マレーシア学会研究大会シンポジウム『比較のなかのマレーシア―民族と宗教に関する国家・地域間比較への展望』京都: 同志社大学今出川キャンパス.
(3) 長津 一史 2013 年 11 月 10 日,「東南アジアの海民サマと海産資源をめぐるネットワーク」国立民族学博物館共同研究シンポジウム『アジア・オセアニアの海域ネットワーク社会と八重山諸島』石垣市: 大濱信泉記念館.
(4) Nagatsu, Kazufumi Oct, 5, 2013, "From Tortoise Shell to Grouper: Marine Recourse Exploitation and the Making of Maritime Creole in Wallacea," presented at International Workshop "World History for Current Issues: Environmental Issues, Globalization, and Conflicts," Tokyo: the University of Tokyo.
(5) 長津 一史 2013 年 6 月 8 日,「漁村研究から海民研究へ―『東アジア・東南アジアにおける漁村形成の比較研究』へのコメント」『日本文化人類学会』第 47 回研究大会, 東京: 慶應義塾大学三田キャンパス.
(6) 長津 一史 2013 年 5 月 26 日,「海道の社会史―ウォーレシアにおける海民ネットワークの動態的連繋」『東南アジアの海とひと』第 7 回研究会, 京都: 京都大学東南アジア研究所.
(7) 長津 一史 2013 年 3 月 3 日,「インドネシア・境域のイスラーム実践―言語使用を中心に」国立民族博物館共同研究会『映像資料を活用したイスラームの多様性についての地域間比較研究』茨木市: 国立民族博物館.
(8) Nagatsu, Kazufumi Feb. 22, 2013, "*Jalan Tikus* on the Sea: Persisting Maritime Frontiers and Multi-layered Networks in Wallacea," presented at Asian

CORE Program Seminar "Interface, Negotiation, and Interaction in Southeast Asia,"Kyoto: CSEAS, Kyoto University.
(9) 長津 一史 2013 年 1 月 15 日, 「人文社会系地域研究における空間情報の利用－インドネシアとフィリピンの民族分布図を題材に」『上智大学大学院グローバル・スタディーズ研究科特別講演会』東京都: 上智大学四谷キャンパス.
(10) 長津 一史 2012 年 11 月 10 日, 「東南アジア海域研究が拓く可能性－海民論と境域論を手がかりに」国立民族博物館共同研究会『アジア・オセアニアにおける海域ネットワーク社会の人類史的研究－資源利用と物質文化の時空間比較』茨木市: 国立民族博物館.
(11) 長津 一史 2012 年 10 月 14 日, 「クレオール海民とその言語実践－インドネシア・カンゲアン諸島のフィールドワーク報告」『東南アジアの海とひと』第６回研究会, 清水市: 東海大学海洋学部.
◇ 赤嶺淳
(12) Akamine, Jun Feb. 18, 2014, "Commercially Exploited Aquatic Species and CITES: Lessons from a Sea Cucumber Case," presented at the International Symposium on Pacific Precious Corals 2014, Taipei: Taipei International Convention Center.
(13) Akamine, Jun Nov. 28, 2013, "Conserving Marine Biodiversity for Cultural Diversity: A Case of Commercially Exploited Aquatic Species in Maritime Southeast Asia," presented at Persidangan Transformasi Sosial Kebangsaan 2013: Kelestarian Pembanguan dan Komuniti Mencapai Wawasan, Kota Kinabalu: Sekolah Sains Sosial, Unibersiti Malaysia Sabah.
(14) Akamine, Jun Feb. 22, 2013, "Whaleshark Used to be Food: How it has Become an Eco-icon Representing Marine Environmental Conservation Movements in the Philippines, presented at Asian CORE Program Seminar "Interface, Negotiation, and Interaction in Southeast Asia," Kyoto: CSEAS, Kyoto University.

〔図書〕（計 10 件）
長津 一史
(1) 長津 一史 2014,「自然資源管理（海域）」『世界民族百科事典』国立民族学博物館（編）, 東京: 丸善書店, 印刷中.
(2) Nagatsu, Kazufumi 2013, "*Jalan Tikus* on the Sea: Persisting Maritime Frontier and Multi Layered Networks in Wallacea," In *Proceedings of Asian CORE Workshop on Interface, Negotiation, and Interaction in Southeast Asia*, edited by CSEAS, Kyoto University, Kyoto: CSEAS, Kyoto University, pp. 76-91.
(3) 長津 一史 2013, 「移動と混淆－バジャウ人の世界」『現代インドネシアを知るための 60 章』村井吉敬ほか（編）東京：明石書店, 28-30 ページ.
(4) 長津 一史 2012, 「インドネシアの二〇〇〇年センサスと民族別人口」『民族大国インドネシア－文化継承とアイデンティティ』鏡味治也（編）東京: 木犀社, 37-48 ページ.
(5) 長津 一史 2012, 「異種混淆性のジェネオロジー－スラウェシ周辺海域におけるサマ人の生成過程とその文脈」『民族大国インドネシア－文化継承とアイデンティティ』鏡味治也（編）東京: 木犀社, 249-284 ページ.
◇ 赤嶺淳
(6) 祖父江 智壮・赤嶺 淳 2014, 『高級化するエビ・簡便化するエビ－グローバル時代の冷凍食』名古屋：グローバル社会を歩く研究会, 118 ページ.
(7) 沼田 愛・赤嶺 淳 2014, 「大漁唄い込み踊にみる閖上のくらし」『無形民俗文化財が被災するということ－東日本大震災と宮城県沿岸部地域社会の民俗誌』高倉浩樹・滝澤克彦（編）新泉社, 147-155 ページ.
(8) Akamine, Jun 2013, Conserving Biodiversity for Cultural Diversity: A Multi-sited Ethnography of Sea Cucumber Wars, Tokyo: Tokai University Press, 286p.
(9) Akamine, Jun 2013, Whale Meat Foodways in the Contemporary Japan: From Fish Sausages in the 1960s to Whale Tongue Dishes in the 1990s, In *Proceedings of the International Conference on Food and Heritage: A Perspective of Safeguarding the Intangible Cultural Heritage*, Hong Kong: Chinese University.
(10) Akamine, Jun 2012, How Sea Cucumbers Sweep the World, In *Sheung Wan*, edited by Sidney Cheung, Hong Kong: Hong Kong Discovery, pp. 23-32.

６．研究組織
(1)研究代表者
長津　一史（NAGATSU, Kazufumi）
東洋大学・社会学部・准教授
研究者番号：20324676

(2)研究分担者
赤嶺　淳（AKAMINE, Jun）
名古屋市立大学・人文社会学部・准教授
研究者番号：90336701

青山和佳（AOYAMA, Waka）
北海道大学大学院・メディアコミュニケーション研究院・准教授
研究者番号：90334218